石巻市 文化財だより No. 2

―特集・市内文化財の現状―

もくじ

埋蔵文化財の現状……2
石巻市板碑の現状……5
石巻市の自然林……6
近世・近代資料の現状…8
住吉の旧毛利家……10
石巻鋳銭場と斉太郎節……12
石巻市根岸地区民俗資料調査報告(1)……13
史跡散歩……16
あとがき……16

発行・石巻市教育委員会
監修・石巻市文化財保護委員会

(写真は河北新報社提供)

埋蔵文化財の現状

文化財保護委員　木村敏郎

はじめに

遺物や遺跡を手がかりとして歴史を復元する科学が考古学である。だから考古学上、遺跡と言えば主に先史時代のそれであるが、歴史時代に入っても遺跡は貴重な歴史の証拠となるものである。

特に古代日本史は六国史を中心とした中央の歴史であり、遠隔の石巻は、日本史の中に断片的に見えかくれするに過ぎない。文献史科を補い、石巻市の古代史を生き生きと甦せるためにも、郷土の遺跡は、その一つ一つが大切に保存されなければならない。

縄文時代の遺跡

市内の縄文遺跡は、消滅したものを含め二十箇所余が確認されている。遺跡の形態上から考察すれば、丘陵鞍部に位置するアサリ等を主体とする貝塚と、丘陵斜面や海蝕台に位置するカキやキサゴ等を主体とした貝塚に大別することができる。前者は北上川の沖積が比較的早く進んだ地域の貝塚で④沼津貝塚、①南境貝塚、⑩小沢貝塚など規模の大きい貝塚がある。沼津貝塚は、縄文時代の石巻を代表する貝塚であることは言うまでもないが、考古学上の記念碑的貝塚であり、昭和四十七年、国指定史跡となった。一万点余を越える毛利コレクションの中心がこの貝塚から出土した骨角器、土器等である。石器時代の生活のすべてをここに見ることができるといっても過言ではない。南境貝塚も、東北地方の縄文時代後期編年上、標準遺物を出土する大貝塚であったが、近年の開発ブームの中で開田と宅造のため主体部を破壊されたことは残念である。後者の多くは、万石浦湾や荻浜湾周辺海蝕台の縁辺部にあり、小規模な岩礁性貝塚が多い。この場合、土質が酸性の地点や小規模な遺跡は貝層を失って包含層の様態を程するものが多い。

しかし、後者の貝塚にも規模の大きいものがある。⑨屋敷浜貝塚や⑤仁斗田貝塚がそれである。特に仁斗田貝塚は規模が大きく、しかも島嶼に営まれた岩礁性貝塚として特異な存在である。開発の進む現在、早急に保護対策を講ずる必要のある重要貝塚の一つである。

弥生時代の遺跡

弥生時代の遺物は現在次の五遺跡で確認されている。

遺跡名	土器型式	出土遺物
垂水囲貝塚	崎山囲式?	土器片
伊原津洞窟	寺下囲式	土器片・人骨
沼津貝塚	福浦島下層式 桝形囲式	土器・石包丁
梨木畑貝塚	桝形囲式	土器片
一本杉貝塚	崎山囲式	土器片

縄文時代に比して、遺跡の数・規模ともに縮少しており、しかも多くの場合、他の時代の遺物を出土する遺跡から断片的な資料が確認されているにすぎない。初期農耕に適合する自然条件がまだ十分熟していなかったものとも考えられる。

今後、この時期の遺跡の探索は、沖積地を注意する必要があろう。

ともかく石巻市におけるこの時代の遺跡の性格や地域の姿は今後の調査にまつところが大きい。

古墳時代～平安時代の遺跡

古墳時代以後になると、土師器や須恵器と呼ばれる土器が使われている。これらを出土する遺跡は現在市内に四十箇所以上の多くを数えることができる。うち大半は奈良時代以降の遺跡で占められているが、これは、律令制度の浸透にともなう、農業基盤の整備また生活や生産技術の高揚を示すものと言えよう。

土師器、須恵器を出土する遺跡については、古代畿内政権の展開と大きなかかわりがあり、地域における政治社会の成立を考える場合、不可欠の存在である。

また遺跡個々についても、それは点の存在ではなく、周辺地域や中央との関連で、線や面として捉えていかねばならぬ性格をもっている。今後土師器、須恵器を出土する遺跡は、更に時期を細分して検討する必要があるが、性格上から概観すると次のようになる。

1、墳墓遺跡

高塚古墳は西日本では四世紀から作られているが、石巻市内のものは七世紀以後の末期古墳と思われ、釜地区に二基認められている。㊽釜西古墳は旧状が著しく失われており、㊼釜東古墳は周辺の宅地造成から地主の好意でからくも保護されている。

石巻市史第一巻では湊五松山洞窟遺跡（横穴古墳?）が報告されているが、現在は採石その他で地形も著しく変わり、地域古代史解明の鍵の一つを失ったことは残念である。

2、生産遺跡

万石浦の南岸には製塩土器を出土する遺跡が点在する。㉝一本杉（須崎浜）はその中でも特に重要な遺跡で、遺物の出土が顕著であり、貝層も認められる。また㉟大浜遺跡の汀線に接した地点には製塩炉や乾溜用ピット?が確認されている。現在製塩土器が確認される遺跡は次のとおりである。

遺跡名	時代	主要出土遺物
梨木畑貝塚	平安	製塩土器・土師・須恵
一本杉貝塚	平安	〃　〃　・土師・須恵
胡桃浜遺跡	平安	〃　〃　・土師・須恵
大浜遺跡	平安	〃　〃　・土師
青木浜遺跡	奈良	〃　〃　・土師・須恵
垂水囲貝塚	平安	〃　〃　・土師・須恵
法音寺下貝塚	平安	〃　〃　・

また製鉄についても近年若干ながら遺跡が確認されて来ているが、未調査のため詳細は不明である。また水沼、真野丘陵奥部の谷合いから、多量の鉄滓が確認されている。既知の遺跡は次のとおり。

遺跡名	時代	主要出土遺物
堤貝塚	平安?	須恵・ライゴ羽口・鉄滓
鹿妻貝塚	中世?	フイゴ羽口・鉄滓
新金沼遺跡	古墳?	鉄滓
羽黒山遺跡	平安?	フイゴ羽口・須恵

窯址については、古く梅ヶ丘遺跡が報告されており、複数の登窯が存在したらしいが現在旧状は全く失われている。

3 集落遺跡

稲井大谷地には一ノ坪地名があり、高木地区にも一ノ坪地名がある。一ノ坪は律令制下条里が設定されたことを暗示する場合が多く、航空写真と明治の土地図から検討して、その可能性が高いと思われる。条里とのかかわりの中で律令農民の生活跡を探る必要がある。遺物の散布から集落跡は、稲井地区、渡波地区、山下大街道地区を考えることができる。稲井地区は真野川周辺の丘陵地帯にあり、真野㊹内原遺跡には堅穴の断面が露出している地点がある。

渡波地区は、鹿妻㊽から鹿松、韮塚㉙へ帯状に二粁以上にわたり遺物が散布しており、大集落を予想させるものがある。東端、垂水囲の岩陰付近からは、蕨手刀が出土するなど、周辺諸遺跡や条里とのかかわりを考えた場合、重要な意義をもつ遺跡である。近年主要部に採石場ができ、次第に住宅も増えて破壊が進んできている。

山下地区は、長者伝説の残る地域で開発も古く、中里地区一帯の広範なデルタ地域に、土師器、須恵器を出土する大集落が存在したと思われるが開発の進んだ現在、多くが宅地化され旧状は失なわれている。大街道地区は、北上川の古い氾濫原であり、それだけに耕作条件がよく、土師、須恵を出土する遺跡が各所に分布している。

中世・近世の遺跡

石巻市におけるこの時期の遺跡は、館跡、集落跡、寺院跡、経塚等に分類することができる。

1、館　跡

市内における館跡は、風土記書上等から、十数箇所の地点を掲げることができるが、当時の伝承を基に記載されたものもあると思われ、吟味が必要である。

現在、顕著な遺構を残し、館跡と確認されるのは左記の箇所である。

遺跡名	規模m	遺構
南境館跡	100×80	土塁・空堀・平場・腰郭
鷲の巣館跡	300×150	〃　〃　〃　〃
高木館跡	150×80	〃　〃　〃　〃
水沼館跡	100×50	空堀・平場
寺館跡	100×80	空堀・平場・井戸・腰郭
早坂山館跡	100×50	〃　〃　土塁
構館跡	100×50	空堀・平場

この他史料上確実な日和山城跡などもあるが、現遺構上確証のないものについては、記載から除いた。遺構の不明確なものについては今後、遺物の面から検討する必要があろう。

2、集落跡

従来、中世期の集落については、言及する資料がほとんどなかったが近年、断片的ではあるが、発見されて来ている。

いまのところ、渡波地区―韮塚、垂水囲の両遺跡から遺物が確認されている。

垂水囲からは、中国産と推定される、青磁や刻線陶器が発見されているし、また韮塚からは、古備前の系列と思われる陶器片が確認されている。両遺跡はその主体が近世にあると思われ、染付の磁器破片等も多量に確認されている。中世文書による郷土史研究に大きな制約のある現在、これらの遺跡が担う役割は大なるものがあろう。

3、寺院跡

中世以前の寺院跡については、伝説的な、魔鬼山寺跡がある。桜川上流の船石権現社一帯がその跡と言われるが、実地調査の結果では、庭園一部の築堤、建物跡と推定される平場地形が認められている。ただし、当該遺構の所属年代が不明なため、あるいは、近世以降の船石権現社にかかる遺構であるのかもしれない。

また安楽寺跡、専称寺跡は中世期の寺院として、その所属年代がほぼあきらかであるが、前者は開田のためその遺構はすでに失われている。専称寺については一部遺構が認められるらしいが未調査のため詳述できない。近世の寺院址としてはその遺構をとどめるものに法泉寺跡がある。建物跡、池跡等の遺構が報ぜられているが、未調査である。

4、経　塚

明神山経塚、平形日影山経塚、田代十三塚の三箇所が知られている。また安楽寺跡からも一字一石経が検出されており この種の経文埋納箇所が存在したらしい。

これらマウンド遺構の中には、本来経塚以外の性格をもつものもあろうと思われるが、この点については将来の調査をまって決定すべきであろう。若干問題はあるが、渡波貉坂山、沢田日影山にも各一基のマウンド状遺構が認められており これらについては、再調査するとともに、今後この種の経塚遺構については、丘陵尾根部分を注目する必要がある。

おわりに

石巻市における遺跡は、社会教育課の遺跡分布調査により、現在まで八十余箇所が確認されているが、その中から随意代表的な遺跡を中心に概説した。しかしながら稲井地区の一部、半島部の調査が不十分であるので、この数は今後増加するであろう。49年度については、特にこうした未調査区域を対象に調査が実施される予定である。

伊原津洞窟出土土器と人骨
（毛利コレクション）

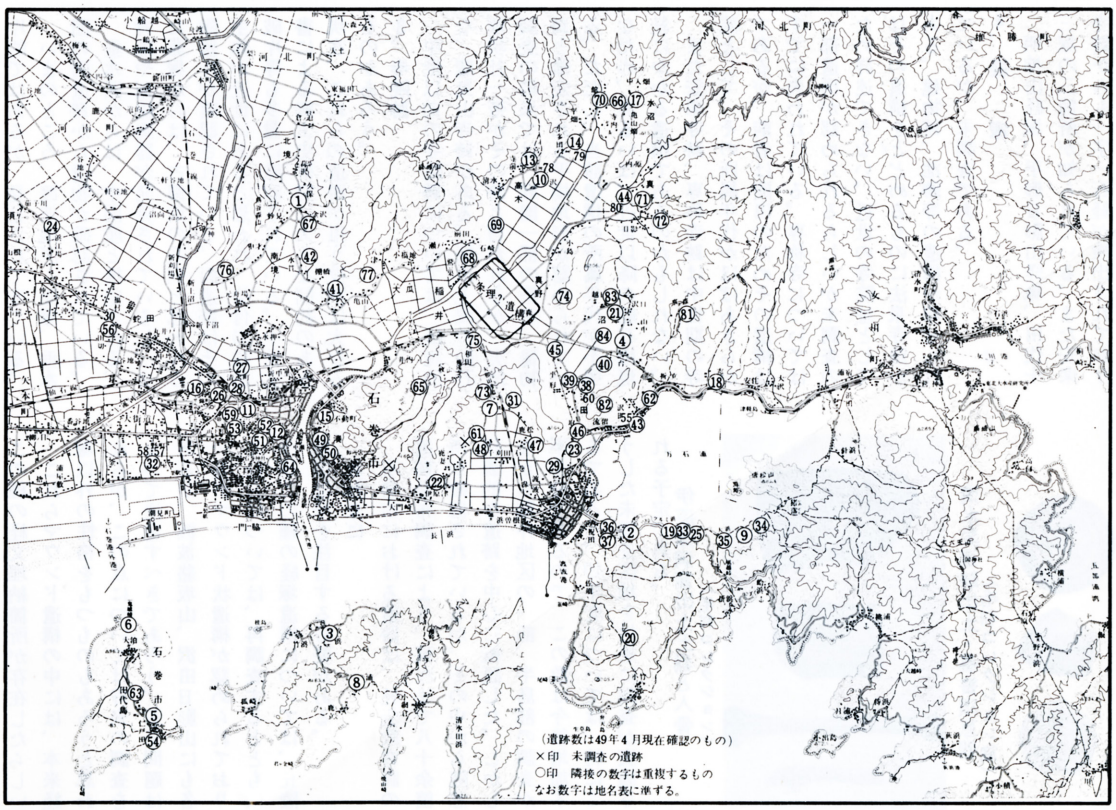
清水尻遺跡出土・墨書須恵器
（毛利コレクション蔵）

石巻市遺跡地名表

No.	遺跡名	時代
1	南境貝塚	縄文
2	梨木畑貝塚	縄文～**平安**
3	アチヤ浜遺跡	縄文
4	沼津貝塚	**縄文**～平安
5	仁斗田貝塚	縄文
6	二鬼城崎遺跡	縄文
7	堤貝塚	**縄文**・平安?
8	福貴屋敷貝塚	縄文
9	屋敷浜貝塚	**縄文**・平安
10	小沢貝塚	**縄文**・平安?
11	明神山下貝塚	縄文
12	永巌寺貝塚	**縄文**・平安?
13	寺前貝塚	縄文
14	小多田遺跡	縄文?
15	舘山遺跡	縄文
16	横堤遺跡	縄文～**奈良**?
17	中入畑遺跡	縄文
18	志の畑遺跡	縄文?
19	胡桃浜遺跡	縄文・**平安**
20	山居遺跡	縄文
21	越田台遺跡	縄文・**平安**
22	伊原津洞窟	弥生～古墳?
23	垂水囲貝塚	縄文～**江戸**?
24	新山崎遺跡	古墳～**平安**
25	神林遺跡	縄文
26	田道町遺跡	古墳?～**平安**
27	中里遺跡	古墳～平安
28	清水尻遺跡	奈良・平安
29	韮塚貝塚	奈良～江戸?
30	芋穀遺跡	古墳?
31	際遺跡	古墳・
32	西三軒屋遺跡	古墳・江戸
33	一本杉貝塚	弥生・**平安**
34	青木浜遺跡	奈良
35	大浜遺跡	平安
36	法音寺下貝塚	平安?
37	五十鈴社下貝塚	平安?
38	平形貝塚	平安
39	平形山根貝塚	平安
40	磯田貝塚	平安
41	箕輪山貝塚	平安
42	水貫山遺跡	平安
43	町貝塚	平安
44	内原遺跡	縄文・**平安**
45	広見山貝塚	平安?
46	取揚坂貝塚	江戸?
47	鹿松貝塚	奈良～平安?
48	鹿妻貝塚	奈良～**江戸**?
49	五松山洞窟	古墳?
50	湊小校庭遺跡	奈良
51	梅ヶ丘遺跡	平安
52	羽黒山遺跡	縄文・平安
53	明神山遺跡	平安
54	稲荷社下遺跡	平安?
55	流留神社下遺跡	?
56	新金沼遺跡	古墳?
57	釜東古墳	古墳
58	釜西古墳	古墳
59	明神山経塚	中世?
60	平形日影山経塚	中世
61	貉坂山経塚	中世?
62	沢田日影山経塚	中世?
63	田代十三塚	中世?
64	日和山経塚	近世?
65	魔鬼山寺跡	中世～近世
66	安楽寺跡	中世
67	南境舘跡	中世
68	鷲の巣舘跡	中世
69	高木舘跡	中世
70	水沼舘跡	中世
71	寺舘跡	中世
72	構舘跡	中世
73	早坂山舘跡	中世
74	陣ヶ森舘跡	中世?
75	大和田舘跡	中世
76	竹下舘跡	中世?
77	大瓜舘跡	中世?
78	三日防舘跡	中世?
79	水沼古舘跡	中世?
80	小屋舘跡	中世?
81	京ヶ森舘跡	中世?
82	平形舘跡	中世
83	出雲舘跡	中世?
84	鶴舘跡	中世?

未調査

●太字は主体時期
●遺跡数は49・4月現在
●遺跡No.は分布図に対照



石巻市・板碑の現状

文化財保護委員　佐藤雄一

東京学芸大学名誉教授、東国板碑調査団長千々和実氏は、四十年になろうとする板碑調査のあとをふり返って、次のように言っておられる。板碑の調査は、特殊なものに限らず平凡なものまで、全部精査すること、破片ももらさない精査によってこそ、いろんな角度からする分類的、計測的、統計的な研究を可能にする基礎資料が整備でき、これが学界の科学的実証的研究を進める必須の工作である。このような考えで永年板碑調査を進められている。氏は、すでに「上野国板碑集録」、「武蔵国板碑集録一・二」を刊行しておられる。このような成果から地方にあっては、従来は古碑として単に年号の古さの故にのみ注意されてき板碑が、我が国中世史研究における石刻文書としての史料的地位をあたえられつゝある。

石巻市は彫刻に便利な稲井石（粘板岩）が近くに産するせいか文永、建治の年号をもつ鎌倉時代の板碑を始めとして、天文年号をもつ安土桃山時代の板碑まである。

石巻市における板碑で、全国に知られているものはなんといっても「吉野先帝御菩提碑」を含む湊吉野町**多福院**の板碑群であろう。同院の板碑は「吉野先帝御菩提碑」のこともあってか、早くから全国に知られていたようである。しかし、この板碑が、「吉野先帝御菩提碑」の関係からよく知られていることは事実であるが、その他の板碑群、現存する約七〇基程の板碑は内容からいって、注目されるに値するものをもっている。第一に年忌供養のための卒塔婆（板碑）造立の種類が、初七日供養から三十三年忌の供養まであり更に、これに逆修供養の碑が加わることによって内容はいっそう豊富である。第二は種子の多彩さである。一尊種子、三尊種子、十三尊種子、五輪塔とあり、更にその彫り方は薬研彫が主であるが、書体は十基程の碑が荘厳体種子であり、種子の研究にも便宜な面がある。また種子に光明真言が多いのも特色である。第三は形状の大小に変化がみられることである。大きいのは3㍍以上のものから、30㌢ぐらいの小さなものまである。多福院の板碑群の多彩さは、近隣の板碑をも多福院に移動して保存したためであろうと考えられる。

この多福院の板碑群は、現在まであまり散逸することなく現在に至っている。しかし、今後もこの状態を維持できるかどうかは必ずしも楽観を許さないようである。それは一般の風潮として、墓地の改葬が進み一家の墓所が大型化し、さかんに工事が行なわれているからである。（工事のつど板碑が移動されることも考えられる）、現に、数基の板碑は移動をしている大日堂脇の小屋に無造作に入れられている板碑などは早急に固定化し、一刻も早く散逸から防ぐ手段を講ずる必要がある。

多福院に隣接している**慈恩院**にも二〇基ばかりの板碑がある。これは多福院の板碑群と同一系列と思われるが、多福院の板碑より厚手のものが多いように見うけられる。毘沙門堂入口脇に雑然と保管されているが、きちんと整理の手を加えれば立派な板碑群として再認識されるに十分である。

その他旧市内には、一皇子神社、住吉神社、松岩寺、南鰐山墓地、旭町公民館脇、永巌寺、寿福寺、称法寺、禅昌寺、鹿妻菅原神社（専称廃寺跡）、釜西古墳脇、日和山南麓等に散在するが、それを板碑と知る人はまれである。日和山海門寺の文保の碑、水押グランドそばの徳治の碑のように、すでにその所在が不明になっているものもあり早急に中世史料としての板碑の存在をひろく市民に知らせる必要があろう。

さらに、市効外の稲井地区には真野長谷寺をはじめとして、山すそにそって、板碑が散在している。**長谷寺**の板碑群は山門を入った右側にある程度整理されてはいるが、倒伏しているものも多く、未整理の状態である。鎌倉時代建治年間の板碑から安土桃山時代の天文年間に及ぶ幅広い年代のひろがりをもっている。内容的にみると、偈等に多福院の板碑とは異なるものが多くみられる。水沼地区の板碑では何といっても安楽寺跡の板碑群をあげねばならない。この水沼地区の板碑については数年前に高橋克弥氏が調査されて、詳細な報告書を出されているが、今もって保存対策は講ぜられないままに各地に散在している。

特に安楽寺跡の板碑群は現地の開田のため、次々に片すみに追いやられ、以前は道路のすぐそばに倒伏のまゝ放置されていた。安楽寺跡は水田と畑に変っているが、ここに立つと寺跡は水沼地区の中心に当り、東西を分ける分岐点になっている。信仰の対象である板碑造立の地にふさわしい。この板碑群は、昨年十二月移転保存が行なわれた。

さらに山沿いに歩を進めると高木西区の**観音堂**の板碑群がある。現在の観音堂創建の時期は不明であるが、裏山に多数の板碑が散在することから考え、相当規模の寺院が存在したと推測される。ここの板碑群は観音堂正面の石段脇に二〇基あまり立てかけてあるが、未整理であることは、他と同じである。ただし、その中で隣地の日野氏の畑のそばに立っている二基はきちんと整理され、堂々たる姿で

他を圧している感がある。昨年二月頃の予備調査で小さくはあるが、地蔵板碑が一基確認されている。現在のところ、市内における唯一の図像板碑である。さらには、板碑の中にまじって「三本足の烏と兎」を刻んだ碑が発見され、民俗学の資料としても貴重なものであることが、東北学院大学岩崎敏夫教授によって確認されている。

その他の稲井地区の板碑は南境金蔵寺に少数ではあるがまとまっている。また竜洞院附近、日向南境の各地にも散在している。上品山頂にも三基程の板碑が認められている。

更に、渡波地区、牡鹿半島方面にも相当数散在しているようであるが、一昨年にある程度の予備調査がなされた他は、精査のなされないままに放置されているのが現状である。

以上、石巻市における板碑の存在場所と保存状況を述べたのであるが、石巻市は宮城県下で有数の板碑密集地域である事は想像していただけると思う。しかしその保存状態は単に移動しないからよしといった状態であり、その殆んどは市民の関心外のものとして放置されている現状である。これが、石巻市における中世の貴重なる史料の存在状態である。宝のもちぐされといった感がないでもない。先にふれたことであるが、海門寺公園の文保の碑、水押グランド脇の徳治の碑のようにすでに失なわれてしまった碑もあるので、早急な保存対策がのぞまれるのである。四十七年度において、**湊御所入の倒伏していた板碑**を湊多福院「御菩提碑」脇に移動したような保存対策が講ぜられることをのぞむものである。先人の築いた文化遺産を後に伝えることが我々の責であると感ずれば、一層その感が深い。

高木・観音堂
板碑の形式を知るに好都合な碑（正安三年）

山下町禅昌寺
中里長者屋敷より移転されたと伝えられる。

鹿妻・専称廃寺・名号碑
（応永元年・一三九四年）

石巻市の自然林
―現状と保護について―

文化財保護委員　佐々木　豊

気候が温暖で雨が多い日本では、自然の原形は森林だとされている。

石巻地方は、暖帯から温帯へ移りかわる中間帯に含まれ、最も自然な林としては、普通には、モミやイヌブナの林が考えられている。しかし、牡鹿半島の海岸部では、暖帯のタブ林、牧山の頂上附近では温帯のブナ林の片鱗を見ることができるように、実際の自然の姿はかなり多様である。

これまでに調査してきた牡鹿半島の海岸部と牧山の自然林について、その概略を報告し、保護についての問題点を提示しておく。

一、牡鹿半島海岸地域

佐須浜以東、沿岸の小さな島を含む海岸地帯で、交通不便なところが多く、自然が割合保たれており、タブ林、クロマツ林、ケヤキ林、イヌシデ林、カシワ林などの自然林が見られる。

1、桂島のタブ林

桂島は竹浜沖に浮かぶ小島で、北半分にタブ林が発達している。タブのほか、モチノキ、シロダモ、ヤブツバキ、トベラ、オオツルマサキキズタ、ヤブコウジなど常緑樹が多い。林床で、シダ類で最も古い形態を残しているといわれるマツバランが発見されており、その北限の産地でもある。

調査したタブ林の中では、最もよく発達した自然度の高い林である。

タブ林の周りは、イブキがみごとな群落をなしており、全体としても自然の姿がよく保存されている島である。

2、小出島のタブ林

一番大きい島であるが、タブ林は狭く西端の巌島神社のそばにある。かなり人為のあとが見られる林で、シナノキを混生しており、イヌガヤが多い。

タブは大きく、胸高直径一メートル四十センチ、高さ二十五メートルに及ぶ、調査したうちでは最も大きいものがある。

島の北側を除いた周辺部は、絶壁状をなすところが多く、クロマツ、アカマツ、イブキなどがそれぞれ群落をなして、自然状態がよく残されているが未調査である。

3、弁天島のタブ林

小竹浜の湾口に浮かぶ島で、南側に面した約半分に、一斉林状のタブ林が発達している。わずかにケヤキ、イヌシデが混生しているのが見られ、北側には、クロマツやイヌシデの優占する群落が見

られる。タブ林としては、仙台湾内で最も規模の大きい林である。

島の周辺には、クロマツ群落、イブキ群落が発達しており、島全体としても自然がよく保存されている。

4、生草島

弁天島の西方の、ごく小さな島で、頂上の部分はクロマツの群落となっている。その周りは、イブキ、トベラ、オオツルマサキ、オオバボタの低木群落となっているが、その中にクロマツが高山帯のハイマツ状になって混生している。さらに下部は、海岸性の草本群落となっており、モデル的な垂直分布を見ることができる。

5、尾崎のイヌシデ林

尾崎神社附近の海岸に、オオバボダイジュ、ケヤキ、カシワ、エゾイタヤなどを混生するイヌシデ林がある。イヌシデの大きなものは、胸高直径六十センチ、高さ十五メートルを越す。

オオバイダイジュは北方系の種であり、このように海岸に見られるのは珍らしく林床に生えているギョウジャニンニクとともに、この林を特徴づけている。

6、小竹浜のカシワ林

小竹浜附近はカシワが目立ち、土壌が浅く、風当たりの強い環境を反映しているようである。

小竹浜では、以前このカシワの大木を切り出し、網を染める材料として方々の浜に売っていたそうで、幹の特徴をもとにしたと思われるカサキという名で呼んでいる。

尾崎と小竹の途中にあるカシワ林は、代表的な林で、カシワを食草として育つ蝶の発生地としても注目されている。胸高直径三十五センチ、高さ十三メートル前後のカシワを優占種とし、ケヤキ、エゾイタヤ、ニガキなどを混生する。林床に、ミチノクヤマタバコ、アマドコロなどの丈の高い草木が多い。

7、佐須のケヤキ林

佐須から尾崎へ行く途中の海岸の、傾斜の急なところに発達している林で、割合広い面積にわたっている。ケヤキのほか、エゾイタヤ、エノキ、ミズキ、アワブキなどが混生し、低木では、イヌガヤ、ムラサキシキブが目立つ。環境の地形的特徴を示す群落である。

以上、海岸地域の主な自然林を紹介したが、自然林の文化財としての価値が一般に認められていないこと、「むろとり」などによる植生の破壊が、この地域での問題点としてあげられる。自然林を紹介

二、牧山

由緒ある社寺・遺跡を含み、自然がよく保たれてきた牧山は、全体が、石巻市の文化財として認識されなければならないと思う。

近年の、無秩序とも言うべき採石のしかたにより変容が著しいが、早急にこれを改め、牧山のすぐれた文化財としての価値を生かし、市民全体の自然、社会教育の場として、保護・活用するよう、総合的見地に立っての施策を希望するものである。

牧山全体で貴重な自然を形成しているのであるが、代表的な自然林として、三つの林を紹介する。

1、頂上附近のモミ林

頂上附近と海溪寺裏山のモミ林は、モ落・落葉広葉樹の林としては、石巻地方で最も自然度の高い林の一つである。胸高直径一メートル、高さ二十メートル前後のモミを主に、ブナ、イヌブナ、アカシデなどの落葉樹を混生し、林床は一面スズタケで被われているモミ、ブナースズタケ群落である。

ブナの老樹（牧山頂上附近のモミ林）

標高の高い所ではブナが多くなり、自然更新のようすも見られ、ムラサキヤシオ、マイズルソウなども観察される。北上山地低山帯のブナ林の残存林としては、県内では金華山を除いて、唯一のものである。

2、御所入のイヌブナ林

御所入の堤の近くにある小林分で、採石の影響を受けている。

隣接するモミ林とともに、この地方の丘陵地帯の極相林とされるモミ、イヌブナ林の残存林で、本来の姿は、モミ、イヌブナースズタケ群落であろうと考えられる。市街地の、しかも低いところに残っているのは、珍らしい例である。

イヌブナは、近くのコナラ林の中で、かなりの回復が認められる。

3、湊小学校裏のシロダモ林

南向きの崖状急傾斜地に発達した暖帯林で日光エネルギーを効果的に吸収でき崖崩れ、落石の多い環境を反映し、特異な組成のケヤキ・シロダモーアオキーオオバジャノヒゲ群落を形成している。

シロダモ、モクゲンジ、オオバノイノモトソウについては、当地方で最大の産地となっている。

林内のほとんどの木に、落石等の影響による状態や、変形が観察され、この林が、厳しい環境に成立しながら、保安林としてすぐれた機能を果たしてきたことを知ることができる。最近、落石、崖崩れが多く、倒れる木が目立ち枯れる木も見られるが、林の西端を破壊したこと等採石の影響が考えられる。この林の性格から考え憂慮すべきことであり、一刻も早い対策を関係当局に要望したい。

近世・近代資料の現状

文化財保護委員　石垣　宏

近世から近代にかけての古文書は、現在市立図書館所蔵のものと、市教委社会教育課調査、第一期文化財保護委員会調査のもの、及び毛利氏所蔵の各種文書が把握されているところである。その他各個人で所蔵している貴重な文献も多数あると思われるが、今後の調査によって、随時古文書の目録を整備したいものと思っている。加えて近世から近代にかけての金石文の調査も今後の課題となっている。

近世から近代の資料として、前述のものを中心としていくつか紹介しておきたい。金石文については、今後の調査で、印章、鏡鑑、梵鐘などを中心に金文を、石文については、石碑を中心に進めるつもりであるが、現在市内に残る有名な石碑として次の四石碑があげられる。市内荻浜月の浦に慶長の遣欧使節として名高い支倉常長出帆地記念碑がある。「欧南使士支倉六右衛門常長解纜地」の碑で、大正十年三月、石巻の小西九兵衛氏が、その偉業を称えて建立したもので、その

裏面に「大正十年三月三日摂政皇太子殿下啓行欧州以九月三日無事還啓、実為無前之盛事、因欲傳比盛事於後世、即乞東郷元帥閣下之書建碑於牡鹿郡月之浦、表仙台遣欧使支倉常長解纜之遺蹟以為記念云、大正十一年六月下浣、小西九兵衛、敬識併建」と記されている。往復七年。牡鹿郡月浦より発し（貞山公治家記録）て、遠くメキシコ、スペイン、ローマへの旅は決して楽ではなかったであろう。その偉業を記念したものである。次に墓碑の例として、石巻築港、北上川改修に多大な業績を残した「川村孫兵衛重吉の墓碑」が、市内釜地区真言宗普誓寺の境内にある。市内東部渡波祝田浜に「久米孝太郎盛治復讐之地」の石碑がある。これは支倉碑と同様、小西氏が建立したもので、安政四（一八五七）年十月九日、越後新発田藩士久米幸太郎、盛次郎兄弟が、父弥五郎兵衛の仇敵滝沢休右衛門を四十一年目に祝田浜で討ったことを記したもので、特筆すべき仇討として数多くの著書に述べられている。文学関係としては、市内日和山公園に元禄二（一六八九）年に石巻を訪れた松尾芭蕉を追慕して、延享五（一七

四八）年俳人が建立した句碑がある。

古文書は、現在市立図書館に多く保存され十進分類法に従って整理され、解読も進んでいる。近世の各種留書としては、「定例留」（天保十四）「満定留」「宝暦五」「駅法留」「地附留」「諸御用後例留」「格式留」（天保十四）がある。安永年間仙台藩が各地の村名由来、人頭、寺社仏閣などを記させたものに風土記があるが、「牡鹿郡風土記御用書出」（安永二）「牡鹿郡湊村風土記」（写）が保存されている。これと関連して藩の改役人が書き記したものとして「牡鹿郡萬御改書上」（元禄十一）があり、この書上は郡村内村毎の石高、面積、人口、肝煎名、神社仏閣を記録したもの。市立図書館で解読済みで原本は女川町照源寺三宅太玄氏所蔵。記録者は御改御役人菊地文右衛門で、これによると、門脇村の人頭百三十四人、石巻村百三十七人、住吉八十三人、蛇田三十六人、湊村百三十人、渡波百十六人と記され、その他田畑を貫高制で示している。この田畑の石高については検地帳がある。「牡鹿郡石巻村御検地帳」（万治三）「牡鹿郡石巻村新田御検地帳」（寛文三、延宝二）がそれで、蔵入地に関しては江戸末期から明治初期にかけて小割帳があり、「石巻

村御蔵入小割帳」（元治、慶応、明治）「蛇田村御蔵入小割帳」（文治、慶応、明治）「袋谷地御蔵入小割帳」（慶応、明治）「墨廼江町御蔵入小割帳（明治）「住吉町御蔵入割帳」（慶応、明治）がある。江戸時代には凶作飢饉が多く、そのため単作地帯の東北は多大な被害を受け、農民の疲幣が大きく、農村の荒廃を招いた時期として、享保、天明、天保期があげられる。その中で天保の大飢饉は深刻な惨害をもたらした。天保四（一八三三）年六月からの大雨のため不作となり、それが天保五、六年と続き、天保七年に大飢饉となったために農民に穀物の備蓄もなく、からくも山野の草木をあさり、一方で餓死者も多数であったという。この石巻における天保飢饉の状態を克明に記したのが「天保耗歳鑑」で、貴重な文献であり、この全文が石巻市史第二巻「凶饉災害史」に載せられている。

次に渡波根岸の雁部氏所蔵の古文書としては、年貢に関するものとして、「御年貢取立帳」（安政五）「夏御年貢償取立帳」（安政六、文久元、慶応二、三）があり、また現在の戸籍簿にあたるものとして人数改帳が数多く保存され、「牡鹿郡根岸村当人数御改帳」（天保四、十三、弘化四、嘉永三、五、六、万延二、元治二）は近世の研究にとって貴重な文献であろう。

その他安政から明治にかけての「諸御用書上留帳」「諸留御触留附渡帳」「御用御布告留控帳」「御用諸書上留帳」などがある。

市内田代島の平塚氏には海運関係の古

文書が多数保存されているが、詳細については、前号で紹介済みなので省略したい。

その外市内の寺院には多数の寺院関係文書が保存所蔵されている。

渡波　雁部家文書目録（鹿松雁部己巳夫氏所蔵）

以上の外にも多数埋もれている古文書も有ると思われるが今後の調査により発堀し、この貴重な史料を大切に保存する方策を講ずるよう願がう次第である。

1（一八二五）文政八年三月　牡鹿郡根岸村真野村入作取拂擁丁場覚帳
2（一八三三）天保四年二月朔日　根岸村當人数御改帳　同村肝入喜兵衛
3（一八四二）〃　十三年二月朔日　牡鹿郡根岸村当人数御改帖　肝入喜右衛門
4（一八四七）弘化四年二月朔日　牡鹿郡根岸村当人数御改帳　肝入喜右衛門
5（一八四九）嘉永二年　牡鹿郡根岸村本地御蔵入当毛御改御物成極小割帳　肝入喜右衛門
6（一八四九）〃（慶応元年分改）　御年貢并諸上納通帳
7（一八五〇）〃　三年二月朔日　牡鹿郡根岸村当人数御改帳　肝入喜右衛門
8（一八五二）〃　五年二月朔日　牡鹿郡根岸村当人数御改帳　肝入喜平治
9（一八五三）〃　六年　牡鹿郡流留村当人数御改帳　肝入忠作
10（一八五四）〃　七年　牡鹿郡根岸村御蔵入本地別段為御備之御引除当毛御改御物成極小割帳　肝入喜平治
11（一八五六）安政三年　牡鹿郡根岸村茶畑御物成小割帳　肝入五郎左衛門
12（一八五七）安政四年二月　牡鹿郡根岸村入数格式證文　肝入五郎左ェ門
13（一八五八）安政五年　牡鹿郡根岸村分同郡真野村江入作御蔵入新田当毛御改御物成極小割帳　肝入五郎左ェ門
14　〃　牡鹿郡根岸村本地当荒起迠養賢堂御相続料江被引除置別極当毛御改御物成極小割帳　肝入五郎左衛門
15　〃　十一月　御年貢取立帖　肝入五郎左衛門
16　〃　十二月　此度　米籾御買備被成置思召ヲ以御金被下置候段被仰渡村人頭割分仕候西付帳　肝入五良左衛門
17　〃　正月吉日　萬金代附渡覚帳　牡鹿郡根岸村分同郡真野村江入作御蔵入新田当毛御改御物成極小割帳肝入五郎左衛門
18（一八五九）〃　六年　夏御年貢償取立帳　肝入五郎左衛門
19（一八五九）安政六年　御年貢諸償取立帳　肝入五郎左衛門
20　〃　十一月吉日　御用諸書上留帳　肝入五郎左衛門
21　〃　六年同七年正月吉日　永代手扣留帳　肝入五郎左衛門
22（一八六〇）〃　七年申ノ二月吉日　根岸村当人数御改帳　肝入五郎左衛門
23（一八六一）萬延二年酉ノ二月朔日　夏御年貢諸償取立帳　肝入五郎左衛門
24　文久元年六月吉日　牡鹿郡根岸村御蔵入新田当御改御物成極小割帳　肝入五郎左衛門
25（一八六二）〃　二年　牡鹿郡根岸村　同郡真野村江入作御蔵入新田当御改御物成極小割帳　肝入五郎左衛門
26　〃　牡鹿郡根岸村本地当荒起迠養賢堂御相続料江被引除置別極当毛御改御物成極小割帳　肝入五郎左衛門
27　〃　牡鹿郡根岸村御蔵入本地当毛御改御物成極小割帳　肝入五郎左衛門
28　〃　牡鹿郡根岸村御蔵入新田当御改御物成極小割帳　肝入五郎左衛門
29（一八六三）文久三年　根岸村当人数御改扣帳　肝入五郎左衛門
30（一八六五）元治二年二月朔日　御年貢并諸上納通帳
31　慶応元年　牡鹿郡根岸村御蔵入本地当毛御改御物成極小割帳　肝入五郎左衛門
32　〃　諸御用御觸留附渡帳　肝入五郎左衛門
33　〃　御年貢并諸上納通帳
34　〃　六月三日　牡鹿郡根岸村御蔵入本地別段為御備之御引除当毛御改御物成極小割帳肝入五郎左衛門
35（一八六六）〃　二年　当冬御年貢諸償取立帳　肝入五郎左衛門
36　〃　乍恐地形分遜願奉申上候御事　牡鹿郡根岸村御百姓原屋舗　源吉
37　〃　十月吉日　当夏御年貢諸償取立帳　肝入五郎左衛門
38（一八六七）〃　三年　御塩場并日雇日記帳　肝入五郎左衛門
39　〃　六月吉日　諸御用書上留帳　肝入五郎左衛門
40（一八六七）〃　四年辰ノ正月吉日　陸前国牡鹿郡根岸村戸籍　肝入　雁部屋五
41（一八六九）明治二年己ノ正月吉日
42（一八七〇）明治三年二月

43　〃　郎左衛門　支配
44（一八七一）明治四年正月七日　陸前国牡鹿郡根岸村戸籍帳肝入五郎左衛門
45　一八七七）〃十年　御用御布告留扣帳　村長雁部五郎左衛門
46（一八七八）〃十一年五月吉日　新板道中往来
47（一八八〇）〃十三年辰ノ正月吉日　醤油賣立帳　雁部氏
48　〃　〃　旧辰ノ十月吉日　御塩場并雇請拂帳　雁部五郎左衛門
49　〃　旧四月二日　田畑散田立附手扣帳　雁部八治郎
50（一八八四）〃十七年正月吉日　婚禮祝儀申受納帳　雁部八治郎
51（一八八七）〃二十年　醤油并釜扣帳
52（一八八八）〃二十一年九月　明治廿年度醤油造石検査薄　牡鹿郡根岸村　雁部八郎
53　〃　一月　醤油仕込帳　牡鹿郡根岸村醤油製造人　雁部八治郎
54（一九〇二）〃三十五年旧正月吉日　醤油醪石高帳　牡鹿郡根岸村　雁部八治郎
55（一九〇三）〃三十六年旧正月元旦　当座日記帳
56（一九〇九）〃四十二年　大福日記帳
57　（不　明）　塩製造帳　製造場　牡鹿郡渡波町字根岸二十五番地　雁部松蔵
58　（不　明）　乍恐地形分遜願奉申上候御事　牡鹿郡根岸村御百姓水抜屋舗弥五右ヱ門
59　（不　明）　乍恐地形分遜願奉申上候御事　牡鹿郡根岸村宮下屋舗　修験　因明院
60　（不　明）　乍恐地形分遜願奉申上候御事　牡鹿郡根岸村御百姓原屋舗　源四郎
61　（不　明）　乍恐地形分遜願奉申上候御事　牡鹿郡根岸村御百姓　平左衛門
62　（不　明）　寺禄財産調　陸前国牡鹿郡石巻町字湊牧山　五十六番地　曹洞宗　梅溪寺
63　（不　明）　横山不動尊　御堂屋根替二王門再建御寄進帳　別当　大徳寺
64　（不　明）　御蔵入新田欠高調書　本地欠高調書扣

その他　書状、證文など多数所蔵。

住吉の旧毛利家

文化財保護委員　高橋勇一郎

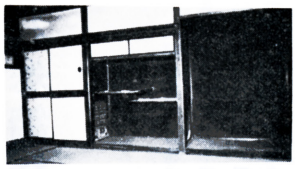
近世海運の発展と共に大きくなった石巻の街も度々の大火に遇っている。宝永四年湊町の大火以来明治二八年の福清の大火まで九回も大火があり街中の大半を焼失し昔の面影はないが、住吉と門脇の一部に藩政時代を偲ばせる民家が散見出来る。その中でも住吉の旧毛利家は当時の世相と幕末の史実を秘め乍ら一段と精彩を放つ建築である。石巻港からの江戸回米は、伊達藩が享保二年住吉に十八棟六万五千俵収納の最大の米蔵を建ててから急に忙しくなった。毛利家は代々住吉の蔵守りを勤め、石巻に来てから三百年にもなると云う。住小校門前にある間口二間半二階建ての質素な建物は毛利本家で当主は名古屋に住む毛利宏さんで毛利家十五代目である。毛利宏さんの家は藩政当時の蔵守りの家の典型的なものだろう。蔵守りは郡奉行の末端で米蔵の警番に当ったが「御百姓雑穀御蔵守」の肩書通り半官半民の待遇だったと云う。写真の建物は毛利十一代七蔵か、十一代利兵衛により建てられたと推察され、百二十年以前の町家である。藩政下では士農工商の生活すべてに干渉する厳しい掟があり、建築については宝歴八年「家作之儀他国者往還の宿をも仕候者は相応に可仕候襖障子にも唐紙の類不苦候其外脇往還並総百姓は随分粗相可仕候大肝入肝入検断は表向板敷迄之儀は不苦候天井長押等は可為無用事」と明治まで不変の基本的な禁令が出されている。

徳川禁令考でも寛永十二年「万石以下之面々雖為番頭座敷二間半梁に不可過」元禄十二年「千石まで二間半梁不可過、千石以下二間梁不可過」等時代によって変るが、梁間、雑作規制が度々出ている。伊達藩でも小身待の蔵守りの家は三間梁以下、足軽の家は二間半と制限され、町家も農家の土間生活を強制した程の厳しい規制はなかったが、梁間は三間以下と定められた様ですべて役人の指図を受けて作る事となって居た。軒高は十五尺位が限度の様で、これら禁令がどの程度守られていたか甚だ凝問であるが、此の建物は禁令を欺瞞したもので、ここに幕藩制の衰退と町人の経済支配の史実が肯ける感がある。

建物は梁間三間半、桁行十間以上（故あって他家に渡り現在解体工事中）一部二階建である。屋根は勾配、破風　風返

の風蝕から又仮御殿、米蔵が木羽葺であった(史料から当初木羽葺だったと考へられる)。現在はスレート、一部瓦葺である。一階表沿いは昔太い木格子が立ててあったと云うが、昭和になり鉄格子窓に、その後現在の姿に変った。二階見付は昔の儘で、曲折り東南の出窓造りに雨戸が立てられ簾子下見の戸袋や化粧組格子の手摺が瀟洒な棰庇と良く釣合っている。本家妻の軒は深く張り出し二重屋根に化粧されいかめしい威圧を感ずる。この様に表沿い妻軒を化粧した建物は市内の古い民家の二階建に良く見受けるが、何れも反対妻は平凡な造りである。

天井無、軒高制限の禁令が苦肉にも生み出したデザインなのか、当時の流行か分らないが、格式を誇った化粧方法の一つだったろう。一階表沿ひは店舗で曲折りの土間と上框の上に帳場格子が立っていたが今は無い。次に十二帖の座敷と十七帖半の居間、土間の玄関台所と間取られている。居間の押入、戸棚仏壇とその上の神棚、自在鉤受丸太、油煙抜小窓はいかにも商家の居間らしい。南縁側の床は切板で突当りに桜丸削の特徴ある手摺をつけた急な階段がある。二階は前室付きの格式ある十五帖の座敷である。十尺の軒高制限のせいか、階高を低く押へ、二階内法は五尺四寸で



ある。天井は無いが天井を吊る、より手間の掛る化粧屋根裏で、化粧和小屋、棟梁、化粧棰が見事な細工、精選された用材で架構されている。東南には紙張りの明障子を立て、北側は書院付きの格調高い欅の床の間である。禁制だった長押はここでは挽立材より高級な面皮の長押、面皮の柱が使用されている。長押の留の部分は面皮丸みを見事に仕合せ、各々異った模様の長押飾金物まで使っている。当時としては最高級の仕上げだったろうし、幕府が極度に戒めた奢侈な建築である。半官半民だった蔵守りの毛利家だからこそ創り得た建築ではないだろうか。毛利家の富の象徴だろうし、石巻を大きく発展させた多くの人々が出入りしただろうと想像したい。この二階座敷こそ戊辰の末期榎本武揚が陣取り、食糧物質を仙台藩に要求した由緒ある部屋である。

明治元年八月仙台藩が抗戦か、恭順か藩論統一出来ない時、榎本は開陽以下七隻の軍艦を寒風沢に集結し、上陸して仙台に入り旧幕臣を仝下に組入れ、その武力を背景に抗戦論をブッて居た。その中には新選組の土方歳三等も居たが、九月二十二日仙台藩は降伏と決定、行先を失った抗戦派の幕臣等は新天地を北海道に求め、渡航のため続々と石巻へ参集して来た。その数三千五百人余り、榎本武揚、歩兵奉行松平太郎　陸軍奉行竹中重固　歩兵奉行並大島圭介、同土方歳三、遊撃隊長人見勝太郎、本多幸七郎　新選組副長古屋作左衛門、桑名藩主松平定敬、備中松山藩主、老中板倉勝静、唐津藩小笠原壹岐守(かみ)　会津家老金成善左衛門、同鴨原長太郎、桑名家老三宅八兵衛、同青地源次郎、松本要人、西郷頼母等僅か一年前は壮々たる身分の諸候や家老をはじめ少しおくれて星詢太郎がアメリカ軍と同じスタイルだったという仙台藩最精鋭の額兵隊一千名を引連れて乗り込んで来た。石巻の役人、商人は騒然とした渦の中に捲き込まれた。この時最高指揮官だった榎本が毛利家の二階座敷に陣取ったのである。当時石巻の町家では一番立派な室だったのだろう。兵達は湊で大篝火を焚いて気勢を揚げるし、日和山では土方らが仏式の大演習をやったり、幕僚の春日左衛門等は北上川を挟んで一戦するとまで云い出した。石巻の住民は我れ先にと疎開をはじめた。この時楽山公の命を受けた烏組の細谷十太夫は石巻に馳着け、星詢太郎や春日と会見し、毛利理惣治(初代)に命じ、米倉を開き、食糧物資を贈り、金を贈り、石巻から立去らせる事に成功し石巻を戦火から守ったのである。この時船に積込んだ物質は膨大なものである酒千樽以下、卵、竹ササラまで内訳を見ると、よくぞこれ程の物が石巻にあったと驚く程のものである。毛利家が中心になり、湊の倉から米を町内近在近郷から僅か一ヶ月足らずの内に三千人の兵が当分間に合うほどの物質食糧を集積供出したのである。その間毛利家は、各諸候の接待、榎本の命令、細谷の命令と、繁忙の一ヶ月だったろう。石巻の商家も街を救う為犠牲になって出来る限りの物質を調達した事と考える。かくして十月十二日開陽以下榎本艦隊は威風堂々と折の浜を出航、北海道に向ったのである。その項西軍の先兵は矢本まで来て居た。船に乗りおくれた者が雲雀野浜で斬られ、郵便局附近にさらし首にされたと云うが確かな史料は余り見当らない。

参考文献

宮城県史
石巻市史
仙台市史
雄勝町史
榎本武揚　加茂儀一
土方弐三のすべて　新人物住来社
仙台戊辰史　藤原相之助
宮城１００年
住吉の旧家毛利理惣治（三原良吉）
東北の民家　小倉　強
日本民家史　藤田元春
東北の歴史　豊田　武
仙台の市街及土木建築　小倉　強
東北の歴史と開発　高橋富雄

石巻鋳銭場と斉太郎節

文化財保護委員　石島恒夫

陸前の国、石巻で最初に鋳銭場が開設されたのが享保十二年（一七二七年）といわれ、その後一三八年余の間、断続的ではあるが、東北の経済の中心地として、わが町は栄えたことになる。

東北の諸藩の中で、幕府直轄の鋳銭場は、「陸奥の石巻、出羽の秋田、佐渡の相川」（造幣史八十年史）とされている。

当時の石巻地区での鋳銭は主として鉄銭でいわゆる砂型鋳造法といわれ、銅、錫、鉛を規定比率で配合した溶液を湯口から注入し、湯がすぐ固まると、型を外し、砂をこわして鋳ばなし銭、いわゆる枝銭をつくり、枝の先の銭を切りとり、やすりで湯ばりをとり、このあと砂垢（あか）をとるため、豆の汁で煮るという（毛利氏コレクション、鋳銭場絵図より）

当時、全国の鋳銭場でつくられた銭は一日三〇万枚、石巻地区でも約七五〇〇枚ぐらいつくられ、産業の規模としては相当なものといえるだろう（造幣局編「貨幣の生い立ち）。

享保十二年から慶応末までの百三十八年余に渡る、鋳銭場の興廃の歴史は、そのまゝ石巻の経済の歴史であったといえるでしょう。

想像以上といわれる賑わいは登米郡米山村の沼倉家の奉願書によっても明らかなように、船便だけの輸送ばかりでなく駄馬による輸送も盛んで一ヶ月千頭余を数え、昼夜を分たず、使役されたとしるされている。

原料及び燃料、輸送等、あらゆる面で、地理的に恵まれた、この石巻が鋳銭場として選ばれる当然の理由があったことがうなづける。

敷地一万坪、数十棟の役所、工場群、二重、三重の門構え、さらに安永年間に山下鍋倉の地にも三基増設された記録からも、最盛期の町の様子は駄馬が町に溢れ、鋳銭場に出入りする奉行、吹方棟梁以下役人、労働者は常時数百人を数え、操業中の石巻は経済的にも東北の中心的役割を果した。（石巻市史第一巻）

こゝで私は石巻の経済の中心的役割を果した「米の積出し港」「石巻鋳銭場」新らしくは「第一銀行の開設」を意義あるものとしたい。（後述）

ところで、この「鋳銭場」と「斉太郎節」についてふれて見たい。「民謡辞典」「日本の民謡」「日本の民謡集」他の著作を見て感ずることは、斉太郎という人物と、その物語の設定は正しいのだろうかということである。

現在残された資料の中からは、安永六年の暴動をうらづけるものは何も見あたらない。

安永六年といえば鋳銭場が開設されて五十年目、一七七七年。当時鋳銭場の外に山下鍋倉前にも三基増設された記録があり、この辺りが鋳銭場事業の最盛期といえるだろう。

勿論、規模を誇る工場といっても当時のことですから保安上からも不備だらけといえるでしょう、当時鋳銭場からの火災も多かったとされていますが石巻の大火の歴史の中にも安永六年は見当りません。文久三年（一八六三年）の大火が鋳銭場から出火し新田町。立町。小野寺横丁。裏町。中町。本町。中瀬。湊田町。大門崎という広範囲の火災によって、鋳銭事業廃止の決着がついた大火をのぞけば、先程の安永年間には歴史的な暴動、火災は見当らない。

私は、この斉太郎物語の底流にある物語性を拾いあげるならば、安永十年十一月の高橋彦三郎と「密鋳銭」をあげたい。

当時、仙台藩は財政上、多額の軍資金調達の必要から幕府の公許を得ずに密銭をつくり、それが露見し、高橋彦三郎、一人の罪として八丈島に流され、遂に帰参せず、其地に終った。当時三十九才（仙台、正楽寺。高橋彦三郎墓誌銘曰）

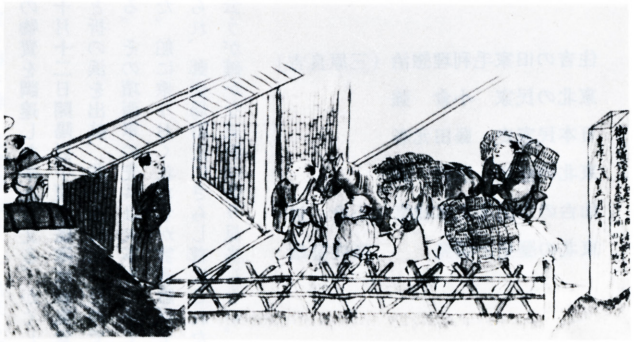
私はこの安永年間の密鋳銭の主と斉太郎節のヒロインが伝説化されているのではないだろうか……と。

斉太郎節（さいたらぶし）はその原調を「鋳銭坂」（鋳吹き唄）といわれ、それが舟こぎ唄に変っていったといわれる、斉太郎は「さいとく」（歳徳）のなまりではないか。いずれにしても鋳銭職人の作業唄が、海の作業唄に変ったものといえるだろう。

そしてもっとも新しい「大漁唄い込み」となって、この斉太郎物語は半ば定説化されている。

新しい民謡として生れ変った「斉太郎節」は何故か、その歴史の背景を知ることによって我々の祖先の血のにじむような仕事の苦しみを感じさせてくれる。そしてその時代の働く人々の心のふるさとの一端をうかがい知ることが出来るのだ。

文化遺産としての民話や民謡の真実性とその正しい傳承の無難しさを痛感する。



享保13年開設　石巻鋳銭場絵図（毛利コレクション）

石巻市

根岸地区民俗資料調査報告（その一）

文化財保護委員　鈴木東行

第1図　石巻・根岸位置図（石巻5万分の1）

A「通称の根岸」
B．旧地場跡（旧塩田）
a．山　崎
b．西ケ崎
c．卯津木花（うつぎばな）
d．橋　下
1 零羊崎神社
2 弁天神社
3 熊野神社
4 草和気神社
5 不動尊神社

写真1
「橋下」より「際」部落を見る
（雁部卯一…右　雁部さつき…左のかや葺屋根の家）

新暦

種類＼月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
いね			浸水	肥入れ　たねあげ　芽だし　たねまき	苗つくり　代　田植	一番除草	二番除草　三番除草			刈入れ　水あげ	脱穀	
麦		麦ふみ				刈入れ　脱穀					たねまき	
大豆					たねまき					かり入れ　豆ひき		
茶												
蚕				春	こ	夏	こ					
薪												
そだまるき												
製塩（地場）			彼岸						彼岸			

生産暦（稲作と制塩を兼ねる）

調査地　根岸鹿松二二〜一
調査日　昭和四八年七月二八日
話者　色川泰助（男九〇才）

仕事と用具（塩田地場作業）

一、仕事の期間と組織

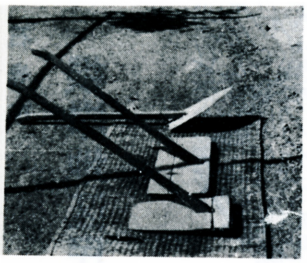
春の彼岸より秋の彼岸までである。一枚は二反内外で、一つの囲いは五枚から七枚位である。主なる囲いは明神釜・石田釜・鹿松釜・際釜囲いで、囲組合制で五～六人で共同製塩していた。八月に塩の神「鳥浜様」（渡波新田町）の祭りがあり、かん水溜（おつぼ）をつくる時「つぼうち唄」を歌いながら、打ち固めた。

（話者…色川泰助　七月二七日）

二、仕事の内容と用具

㈠　砂の運搬

春に塩田「三本まんのう」で側溝（堀…一反五畝～二反）をほり、海（長浜）から水際の美しい砂をはこびとりかえる。運搬は「砂ずみ舟」で「舟入れ」（塩田にくる海水の通路）を通り、陸地は「だんこ」に砂を入れ馬ではこんだ。昔は浜から直接、馬車ではこび、塩田のはしに砂を置いた場合は「もっこ」「ばいすけ」（竹製）で「だい」（台…鹹水箱）の後におき早朝、四すみに玉にする。



写真二　塩田地場作業用具（上から「すくい」「かっつあ」「木ぐわ」）

㈡、地場作業

三時～四時頃起床、朝食前、四キロメートルもある地場に行く。地面一反六畝、一人で玉数七〇を朝の仕事として「すくい」でちらす。「まんぐわ」で曳いて砂を乾燥させる。一時間の休み時間をとり、午後三時頃「よせいた」で寄せ集め「かっつあ」でほした砂を「だ（で）い」に山にもる。砂寄せは若い男の仕事である。「だ・（で）い」の前の「小つぼ」から「だい」に塩水をかける。かけた塩水は「だ（で）い」の砂を通って樋で「おつぼ」（たがをかけた桶）にたまる。たまった塩水を「にね桶」（二斗八升入れ）で（約四〇貫）かついではしご段をのぼり「やぐら」にまける。「やぐら」のかん水は竹のくだを通って「お（大）つぼ」（上幅…五m、下幅…三m、深さ一m五〇赤土製）に溜まる（一八度～二〇度のかん水）溜まったかん水を釜（幅…一丈二尺、高さ…五寸、八石入る）で煮る。二人で夜通しで交代で煮る「かます」約八俵（一俵一二貫）をとる。水かけは年寄りと女の仕事である。地場作業をしながら養蚕をかねた重労働である。

（話者…根岸際四、津田はしめ（女九〇才）
津田新次郎（男六七才）七・二八）

仕事着

調査地　石巻市根岸字際一九ノ一
調査日　昭和四十八年七月二八日
話　者　雁部はつよ（89才）
雁部さつき（82才）

	農業		山林	塩田	
	男	女		男	女
頭・顔	てぬぐい あみがさ（夏）	おこさずきん（冬） （てぬぐいの上に） あみがさ（夏）		ずきん（てぬぐい二枚）	ずきん（てぬぐい二枚）
手	こて	こて	こて（ズック製）	こっぱこて	こっぱこて
上体	はんてん 木綿シャツ	はんてん（5月） （たすきをして） ちゃんちゃんこ	さしこ （二枚にさした）		
下体	長ももひき（秋） 半こももひき（夏） きやはん	長ももひき（秋） 半こももひき（夏） きやはん 前かけ、こしまき	ももひき（ズック製） 横きやはん（男） （麻でつくる） はばき（男）	半こももひき（夏） おかももひき（秋）	半こももひき（夏） おかももひき
足	すあし	すあし	メリケンズック （うすい）	わらぞうり わらじ すあし	地場たび（杉ざし） わらじ すあし
雨具	みの	背ごも			

染・織

一、染色

「あい」……「あい」を畑に植えたのを秋に刈る。葉だけをこき、手でもんで、むして床を作ってねかす。「あい玉」にかためて軒場に雨の当たらないように干す。「あい色」を出すときそれをこなし、「こが」に入れて発酵させる。ぶくぶく泡が出たころ、白い糸を買って染める。

「茶」……「かしわ」幹の皮（カシヤ木）、五升、八升だきの釜で煮る。

（話者…根岸字橋の下　保原はぎの八三才　七月二八日）

「ねずみ」……桐の木を焼いて粉にしてとる。

「赤」……はまなすの花からとる。

染料は「こが」に入れて、こくしたい時、何度もつけてしぼる。混用としてかたずみのあく（灰）・くどのあくをとっておいて使用する。

（話者…雁部はつよ（八九才）七月二九日）

二、手織…綿を買い、（綿を植えたのは少数であった）綿から糸車で糸をつむぎ、

なべに入れて糸を煮て、炉ばたでかわかす。糸から布を「はた」で織る。自給自足で、女性の冬期間の仕事とされていた。

（話者…保原はぎの　七・二八）

「麻糸」…麻の皮から細く繊維をとって炭酸を入れて煮て、やわらかにしてつむぎ織る。

（話者…雁部さつき　七・二八）

毎日の食事

一、主食…米に麦。困った時は、白米に豆を混合して食べたり、七分づき、五分づきの玄米を食べた。また小麦粉をまぜて「そば」をつくる。ほし葉汁に入れて「そばけ」にして食べた。たばこは「重箱」「わっぱ」で運ぶ。

写真3　「つけおけ」「手さげ」

二、幅食…菜・大根・かき豆・ささげ塩びきを主として食べ、生魚を買うのは珍らしかった。困った時は「おから」を食べた。

（話者…雁部さつき　七・二八）

赤飯・餅・だんご

一、赤飯…祭りの日、前日からまわす。節句・田植え時期・毎月一日・十五日に変わりごと・お七夜・歳かさね祝い（男…七・一五・二五・四二　女…一三・一九・二三）

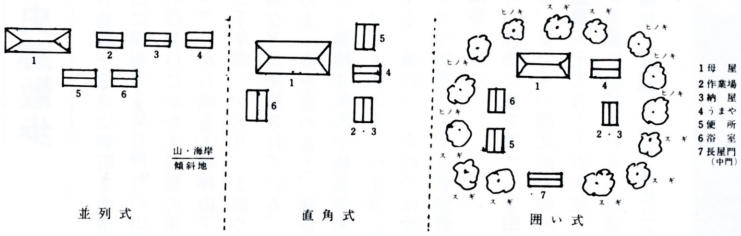
二　餅…正月（米の餅）節句・田植え時期にはくさ餅

三、だんご…盆と彼岸の中日

（話者…馬場とり（八十八才）…根岸卯津木花三六　七・二八）

住居

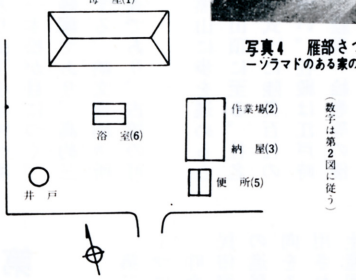
一、陸前北部の民家



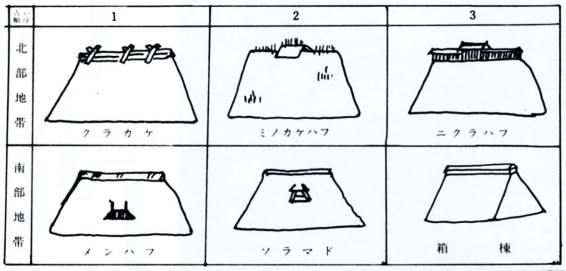
第2図　屋敷構えと家屋配置図(和歌森太郎編―「陸前北部の民俗」より)

二、石巻市根岸の民家

写真4　雁部さつきさん宅(際19)
―ソラマドのある家の屋敷構え第3図参照

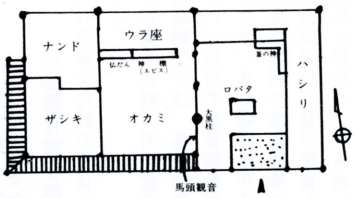


第4図　家屋配置図(直角式)
(際19　雁部さつきさん宅)

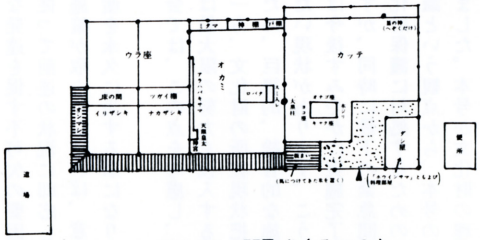


第3図　屋根形と煙抜きの図譜
(和歌森太郎編―「陸前北部の民俗」より)

写真5　津田政人氏宅(際44)
―ソラマドのある置屋の家―



第5図　間取り(その1)一般農家
(際91―雁部さつきさん宅)



第6図　間取り(その2)
(熊野神社　法印　津田政人氏宅)

付記

今回は調査項目二〇（1総観、2生産暦、3仕事と用具、4仕事着、5染・織、6毎日の食事、7赤飯・餅・だんご、8住居、9かまど・いろり、10社会生活、11組・講の用具、12運搬、13交易、14一生の儀礼、15別火・墓制、16年中行事、17祭・道祖神、18山車・舞台など、19その他重要なもの、20コレクション）のうち一三項目調査した。（但し報告は、そのうちの七項目である）

つぎに調査した結果について所見をのべる。

近時の生活様式の改変のため用具類は廃棄・滅失が目立っている（例…地場作業の用具は三点しか見あたらなかった）。したがって今後は調査地を拡大し、緊急に資料の保存、保護対策を期すべきである。

特に今回の調査で東北学院大生…阿部光良君（総観）と、遊佐講子さん（衣・食の調査）の御協力と石巻工業高校人文科学部員伊藤昭彦・渡辺清美君の参加を得たことを深く感謝します。

史跡散歩

石巻駅を起点に穀町を西進すると、明神山に鎮座する鳥谷神社の山裾にかかる。

石段登口にかかる鳥居の東南部には、ハマグリから成る①**明神山下貝塚**（七千～三千年前）があり、土器や石斧、貝製腕輪などが発見されている。

そのまゝ歩を進めると、建長七年（一二五五）執権北条氏が建長寺末寺として開山させたと伝える、全正寺（②**禅昌寺**）に至る。境内に、市内では珍らしい石造宝キョウ印塔、中里長者屋敷から移転の板碑等がある。

寺の北西に道を隔てて③**田道将軍塚**がある。またその西北前の畑地には④**田道町遺跡**（千五百～千百年前）があり、土器が多量に散見される。田道公説話と、同時代の遺跡という対比はおもしろい。

再び禅昌寺側にもどり山下小学校へ坂道を登ると、高所の一本松が目につく。この根元が⑤**明神山経塚**であり、高約三メートルの塚が存在する。納文埋納ヵ所といわれるが、未調査であり、古墳の可能性もある。

鰐山墓地を抜け羽黒山に歩を進めると⑥**鳥谷神社**が鎮座する山頂に至る。社名は古く平安時代「延喜式」に陸奥百社の一つとして見え由緒深い。社殿は江戸時代前期の造成であり、絵馬、絵巻等の優品がある。附近には⑦**羽黒山遺跡**（千百年前）⑧**梅ヶ丘遺跡**（千二百年前）があり、歴史の深さを物語っている。

石巻駅――明神山下貝塚――（約五キロ　徒歩2時間）
羽黒山――明神山経塚――禅昌寺
田道町遺跡――（田道将軍塚）

第二号刊行について（あとがき）

社会教育課事務局

第二号は「石巻市文化財の現状」をテーマに編集しました。

昨今、特に埋蔵文化財、天然記念物、民俗資料、建造物などは、各種開発行為の進展に伴ない、当市でも急激な消失傾向をみせています。また昭和近年まで使用された各種生活用具や仕事着等の衣服生産用具等の民俗資料、及び民家も生活の改変、近代化に伴ない、いきおい廃棄散いつの傾向をたどりつゝあります。

これら文化財は私達を取り巻く環境、（歴史的環境）の一因子として、人間精神の健全な発達を促す不可欠の要因であります。従って前述の状況に即応した適切な保護施策が取られなければ、意義ある歴史遺産を永久に失する事になりましよう。

当委員会では、この点を考慮し、保護については最大限の努力を投入する考えですが、一方、文化財の所在現状把握が不完全なため、巨視的、総合的な施策を行ないがたい現状があります。こうした基本調査は今後すみやかに実施完了させる意向ですが、同時に最下の緊急問題でもある文化財保護に対処するための早急な現状認識という観点から、本号のテーマとなりました。本号が文化財の理解、保護の促進に資するところがあれば幸いです。なお末尾ですが、本紙監修に尽力いただいた文化財保護委員会には厚くお礼を申し上げ、辞といたします。